

第5章

客観的な根拠を重視した 教育政策（EBPM）の推進

- ・ 倉吉市教育委員会
- ・ 倉吉市立打吹小学校
- ・ 倉吉市立西中学校
- ・ 岩美町教育委員会
- ・ 岩美町立岩美南小学校

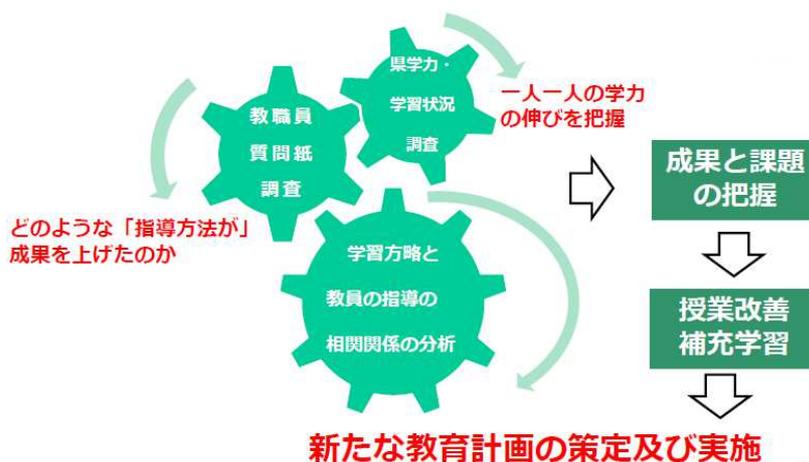
県教育委員会と倉吉市教育委員会及び岩美町教育委員会が共同で行っている実証研究の取組を紹介します。



客観的な根拠を重視した教育政策（EBPM[※]）の推進について

※EBPM：Evidence Based Policy Making の略称で、エビデンス（客観的な根拠）に基づき、より実効性の高い政策を立案すること

とっとり学力・学習状況調査を全面実施して5年目を迎え、個人又は集団における学力の状況、学力を支える力である学習方略や非認知能力を経年で調査することで、学力レベルの伸びや非認知能力等の変化を見ることができるようになった。伸びに着目した取組に加え、令和5年度からは、伸びそのものの変化（伸びの伸び）も見取ることができるようになっている。ここで得られたデータをエビデンス（客観的な根拠）として活用し、教育政策に生かすことで、よりよい教育実践ができると考えている。しかし、教育データの活用については、全国的にも先行事例が少ないため、県教育委員会と倉吉市教育委員会、境港市教育委員会及び岩美町教育委員会とが連携し、市町の学校のデータを基に共同で実証研究を行い、そこで得られた成果や好事例を県内の学校に発信していくこととする。



EBPMを推進することで、次の3つのような効果を期待している。

- ①優れた教師の経験や勘、そして匠の指導技術を、言語化・可視化・定量化するなどして、若手教師に効率的・効果的に伝承することができる。
- ②データによるエビデンスと教師の経験や勘を融合し、より効果の高い教育実践を行うことができる。
- ③今まで良いとされている取組、常識だと思われる取組について、その効果を検証することで、エビデンスに基づいたスクラップアンドビルドを推し進めることができる。

この3つの視点を持ちながら、指導・支援の在り方の見直しや校内研究等の効果検証を行い、次年度以降の教育政策に生かすことで、この調査結果をエビデンスとした効果の高い教育を推進したいと考えている。

今年度、県教育委員会と倉吉市教育委員会、境港市教育委員会及び岩美町教育委員会、そして文部科学省地方教育アドバイザーや鳥取県教育データ活用アドバイザーが一丸となって進めてきた実証研究について、今まで取り組んできたことや協議してきたこと、そして、得られた知見をまとめた。

1 研究推進の方法

- (1) 市町教育委員会と県教育委員会で実証研究チームを構成する。
- (2) テーマを設定する。
- (3) とっとり学力・学習状況調査の調査結果を分析する。
- (4) 学校を訪問し、聞き取り調査等を行う。
- (5) 調査や取組の内容をまとめる。
- (6) とっとり学力・学習状況調査報告書に調査結果や取組を掲載して周知を図る。

2 研究のサポート

文部科学省地方教育アドバイザー及び鳥取県教育データ活用アドバイザーから、データ分析の意義や方法、教育政策の検証等について指導・助言を受ける。

◇地方教育アドバイザー

文部科学省大臣官房人事課 人事企画官（併）副長

大江 耕太郎 氏（令和7年8月まで）

スポーツ庁健康スポーツ課 企画係長

藤野 萌子 氏（令和7年8月まで）

文部科学省初等中等教育局教育職員政策課 教員免許・研修企画室長

大根田 頼尚 氏（令和7年9月から）

文部科学省研究開発局宇宙開発利用課 国際係長

大井 康平 氏（令和7年9月から）

◇鳥取県教育データ活用アドバイザー

大井 康平 氏（令和7年8月まで）

3 学校の教育効果を図る視点

以下の3点に着目し、分析を進める。

- (1) 学力が伸びた児童生徒の割合・学力レベルの伸び
- (2) 非認知能力、学習方略
- (3) 児童生徒の学力が伸びた学級の割合

客観的な根拠を重視した教育政策（EBPM）の推進 【倉吉市教育委員会の取組】

1 はじめに

教育データを効果的に活用した教育施策を推進していくために、令和4年度より、倉吉市教育委員会と県教育委員会は、倉吉市内の学校のデータを基に共同で実証研究を行い、そこで得られた成果や好事例を県内の学校に発信することとしている。

2 研究テーマ

- ・小学校において、中学校でも学力を伸ばすための指導のポイントは何か。
（どのような指導が中学校で学力を伸ばし続けることにつながるか。）
- ・中学校において、学力を伸ばす学級経営・学年経営のポイントは何か。※学年主任の役割
（どのような学級経営・学年経営が学力を伸ばし続けることにつながるか。）

3 具体的取組の実際

（1）とっとり学力・学習状況調査倉吉市プロジェクトについて

とっとり学力・学習状況調査の結果を活用した学校マネジメントについてプロジェクトメンバーを中心に共同研究を進めることを通して、とっとり学力・学習状況調査の学校マネジメントの資源としての可能性を探るとともに、その進捗状況及び成果等を普及し、各学校におけるマネジメント能力向上を目指すため令和5年度にプロジェクトを立ち上げ、研究を進めてきた。

○倉吉市立打吹小学校

「学校マネジメントへの活用」

- ・児童の伸びについて追跡調査を行いながら、講じた教育施策の効果検証を行う。
- ・校内研究等の学校における教育施策の指標や改善の方向性の根拠とする。
- ・教職員の人材育成を図るために活用する。

○倉吉市立西中学校

「中学校における活用に係る好事例の創出」

- ・学年会議において、分析シート（学校用3）を活用し、学力を伸ばした生徒の特徴や学力を伸ばしたと考えられる教師の手立てについて協議する。
- ・不登校対策についての協議（「水曜会議」）において、帳票40を活用し、気になる生徒への手立てについて検討する。
- ・校内研究において、授業の質と非認知能力の向上を図るための視点や研究指標として活用する。

○学年主任インタビュー及び学級担任・教科担任アンケート（日記）調査

- ・とっとり学力・学習状況調査において、学力や非認知能力等を伸ばしている学校の学年主任へのインタビューや学級担任・教科担任にアンケート（日記）調査を行い、学力を伸ばす指導のポイントや学級経営・学年経営についての分析を進め、共通事項や傾向を整理し、各学校へ周知する。

（2）地方教育アドバイザーによる市教育委員会及び学校訪問

地方教育アドバイザーを招聘し、学校訪問及び倉吉市教育委員会訪問を行い、とっとり学力・学習状況調査の意義や教育データの活用についてアドバイスをいただいた。また、今年度の調査結果をもとに今後の取組の方向性について協議を行った。

(3) スケジュール

| 日にち | 内容 | 参加者 |
|-----------|----------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------|
| 4月28日(月) | 第1回チーム会議 ・現状についての情報共有 ・取組についての協議 | ・市教委 ・県教委 |
| 7月8日(火) | 第2回チーム会議 ・西中学校訪問 校長面談等 | ・市教委 ・県教委 ・学校 |
| 7月16日(水) | 第3回チーム会議 ・打吹小学校訪問 校長面談等 | ・市教委 ・県教委 ・学校 |
| 11月26日(水) | 第4回チーム会議兼地方教育アドバイザーによる市教委及び学校訪問 ・学校訪問 調査分析及び取組について ・倉吉市教育委員会への訪問 取組について協議 | ・市教委 ・県教委 ・学校 ・地方教育アドバイザー |
| 12月9日(火) | 第5回チーム会議 ・現状についての情報共有 ・調査分析及び調査方法等について協議 | ・市教委 ・県教委 ・学校 |
| 12月9日(火) | 倉吉市プロジェクトミーティング ・打吹小学校訪問 調査結果をもとにした協議 学校マネジメントへの活用についての協議 | ・市教委 ・県教委 ・学校 |
| 12月9日(火) | 倉吉市プロジェクトミーティング ・西中学校訪問 調査結果をもとにした協議 校内研究への活用についての協議 | ・市教委 ・県教委 ・学校 |
| 1月13日(火) | 学校マネジメント研修会における実践発表 ・打吹小学校、西中学校 | ・市教委 ・県教委 ・学校管理職等 |
| 3月2日(月) | 兵庫教育大学との共同研究分析報告会 | ・市教委 ・県教委 ・学校 |

4 成果と課題

(1) 成果

- 地方教育アドバイザー、倉吉市教育委員会、県教育委員会が連携し、取組の方向性を協議することで、非認知能力、学習方略等に着目し、児童生徒一人一人の学力を伸ばしていくとというととり学力・学習状況調査の意義が各学校に浸透し、調査結果の分析をもとにした授業改善や校内研究等へつなげることができた。
- 倉吉市プロジェクトを実施し、倉吉市教育委員会と県教育委員会がととり学力・学習状況調査の調査結果の活用について、共同して考え、サポートすることで、打吹小学校及び西中学校の好事例に見られるような効果的活用につながった。
- 学年主任インタビュー及び学級担任・教科担任アンケート(日記)により、学力や非認知能力等を伸ばしている取組の共通点を見出すことができた。(詳細は次ページ以降に掲載)

(2) 課題

- ととり学力・学習状況調査の効果的な活用について、倉吉市プロジェクトによって創出された打吹小学校と西中学校での研究成果や好事例を周知する等、市全体や県全体でより一層推進することが必要である。

とっとり学力・学習状況調査 倉吉市EBPMプロジェクト調査研究分析 1

-中学校学年主任インタビュー調査-

倉吉市教育委員会事務局学校教育課

1 研究の目的

- ・とっとり学力・学習状況調査における客観的な根拠を重視した教育政策（EBPM）の推進
- ・調査内容から共通項や傾向を見出し、得られた知見を教師の指導の参考として広げる

2 研究内容

- ・中学校における学年経営のポイント

3 調査について

- (1) 方法 インタビュー調査
- (2) 内容 学年経営において大事にしていること
- (3) 対象者の選出基準

次の観点について、多くの項目で一定の基準を満たす学級の割合が多い学年の学年主任

- ◆学力を伸ばした児童生徒の割合（県平均+5%以上）
- ◆学力レベル（前年度比+2以上）
- ◆「主体的・対話的で深い学び」（3.8以上）
- ◆「自己効力感」（県平均以上）

- (4) 実施日時 令和7年12月24日（水）～令和7年12月25日（木）

- (5) 分析方法 生成AI（NotebookLM/Chat GPT/Google Gemini）を活用した傾向分析

4 調査結果

インタビュー結果を3つの異なるAIを活用し、分析を進めた。使用したAIが異なるにもかかわらず、共通する学年主任像が導き出され、共通した考えに基づいていることが示唆された。

理想の学年主任像 「環境を整えるプロデューサー」

1 最優先事項は教員集団のリスク管理

- ◆学年主任の役割は「教員をどう守り、機能させるか」
- ◆困りごとを一人で抱え込ませないための「情報のオープン化」や互いにカバーし合える「関係性の構築」を重視
- ◆チームワークは業務効率のためだけでなく、教員の精神的な安全性を確保するため

2 役割分担の明確化

- ◆学年主任と担任の関係性は上下関係ではなく、機能的な役割分担
- ◆「掃除屋」と「黒子」
学年主任は、トラブルの初期消火や環境整備を行い、担任が学級経営という表舞台上で輝けるように支えるスタンス

3 足並みの揃え方

- ◆「全てを統一する」から「柔軟な連携」へ
「最低限」と「独自性」を分離する。安全や命に関わること、いじめ対応など「最低限のライン」は厳格に揃えるが、それ以外は担任のカラー（個性や強み）を尊重する。
- ◆良い実践の横展開
強制的な統一ではなく、あるクラスの良い実践を共有し、自然に真似し合うことで全体を底上げ

4 生徒指導における要

- ◆力で抑え込むのではなく、集団の心理的安定を狙うアプローチ
指導の前に、まず、生徒の言い分を聞くことで、納得感と安心感を醸成する（不信感の払拭）
- ◆サイレントマジョリティの重視
騒がしい生徒への対応に追われるのではなく、真面目にコツコツ頑張っている生徒を意図的に見つけ、褒め、認め、学年の柱にすることで集団全体を安定させる。

5 保護者対応

- ◆アナログかつ積極的な信頼構築
- ◆担任とともに学年主任が同行

とっとり学力・学習状況調査 倉吉市EBPMプロジェクト調査研究分析2 -小中学校学級担任・教科担任アンケート（日記）分析-

倉吉市教育委員会事務局学校教育課

1 研究の目的

- ・とっとり学力・学習状況調査における客観的な根拠を重視した教育政策（EBPM）の推進
- ・調査内容から共通項や傾向を見出し、得られた知見を教師の指導の参考として広げる

2 研究内容

- ・小中学校において、学力を伸ばすための指導のポイント

3 調査について

- (1) 方法 アンケート form による回答
- (2) 内容 ①学級経営や授業づくりにおいて大事にしていること（実施期間中に5回以上）
②教師として力を高めるために心がけていることや取り組んでいること（1回）
- (3) 対象者の選出基準
次の観点について、多くの項目で一定の基準を満たす学級担任、教科担任
 - ◆学力を伸ばした児童生徒の割合（県平均+5%以上）
 - ◆学力レベル（前年度比+2以上）
 - ◆「主体的・対話的で深い学び」（3.8以上）
 - ◆「自己効力感」（県平均以上）
- (4) 実施日時 令和8年1月13日（火）～令和8年1月27日（火）
- (5) 分析方法 生成AI（NotebookLM/Chat GPT/Google Gemini）を活用した傾向分析

4 調査結果

個々の先生の体験談（日記）を定性データとして扱い、共通するパターンを抽出した。その結果、共通項があることが見えてきた。

指導を支える「3つの大きな柱」～成長を支える共通項～

1 安心感の土台づくり

- ◆「失敗しても大丈夫」という雰囲気、子どもたちが挑戦できる環境をつくる。
 - ・間違いの肯定
試行錯誤を歓迎する言葉かけ
 - ・プロセスの共有
正解を出すこと以上に、そこに至るまでの「考え方」をクラス全体で大切にする雰囲気づくり

2 「届く」言葉選び

- ◆抽象的な賞賛ではなく、具体的な「事実」に基づいたフィードバックにより、自己効力感を育成する。
 - ・抽象的：「よくできたね」「すごいね」
 - ・具体的：「昨日より計算スピードが上がっているね」「文字を丁寧に書いているね」

3 微細な変化の見取りと手立て

- ◆学習面だけでなく、生活面の小さなサインを捉え、丁寧に対応する。
 - ・朝の挨拶のトーン、ノートの文字の乱れ等からその日の調子や心の状況を見取り、子どもが安心して学習に取り組めるようにする。

教師の力量向上を目指して～「自己成長」と「深い児童理解」が学力向上の基盤～

1 継続的な学び

- ◆謙虚に学び、すぐに取り入れる姿勢
- ・他校の実践、他教員との相談連携、専門書の読書

2 児童生徒理解・関係づくり

- ◆安心感と信頼が、学習の土台となる
- ・日々の対話を大切にし、SOS や成長のサインを見逃さないようにする。

3 授業づくり・指導方法

- ◆「教える」よりも「引き出す」→アウトプット重視の指導
- ・子どもが表現する時間を意図的に確保する。

4 教材研究・授業準備

- ◆「子どものつまずき」を予見した準備
- ・本時のねらい（つけたい力）を明確化
- ・単元全体を通した構想 思考のプロセス

5 チーム協働と環境づくり

- ◆組織で支え、全員で活躍できる場を作る
- ・一人で抱え込まず、チームで情報を共有する。
- ・一人一人活躍できる場を設定し、学級目標に近づける活動を取り入れる。

5 まとめ

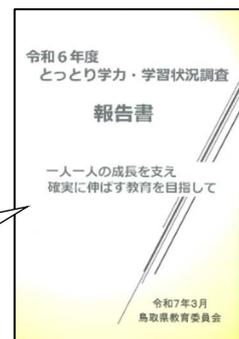
本調査分析により、学力を伸ばしている学級では、前述した「1 安心感の土台づくり」、「2 『届く』言葉選び」、「3 微細な変化の見取りと手立て」といった学力を支える土台づくりに共通して取り組んでいることがわかった。先行研究で明らかにされてきた学級経営の具体として、共通点を見出したことは、本調査の成果であると言える。

また、これらの共通点は特別な環境や準備が必要なことではなく、心がければすぐにでも実行できる内容であり、汎用性が高い取組であるため、多くの教員の参考になると考える。

客観的な根拠を重視した教育政策（EBPM）の推進 【「とっとり学力・学習状況調査倉吉市プロジェクト」－倉吉市立打吹小学校の事例】

本報告では、打吹小学校が標記のプロジェクトを通して3年間取り組んできたことを総括し、学校におけるEBPMを推進していく上でヒントとなるものを示す。

なお、本報告は、昨年度の報告書でも紹介した打吹小学校の具体的取組に、今年度の取組を加え整理したものである。

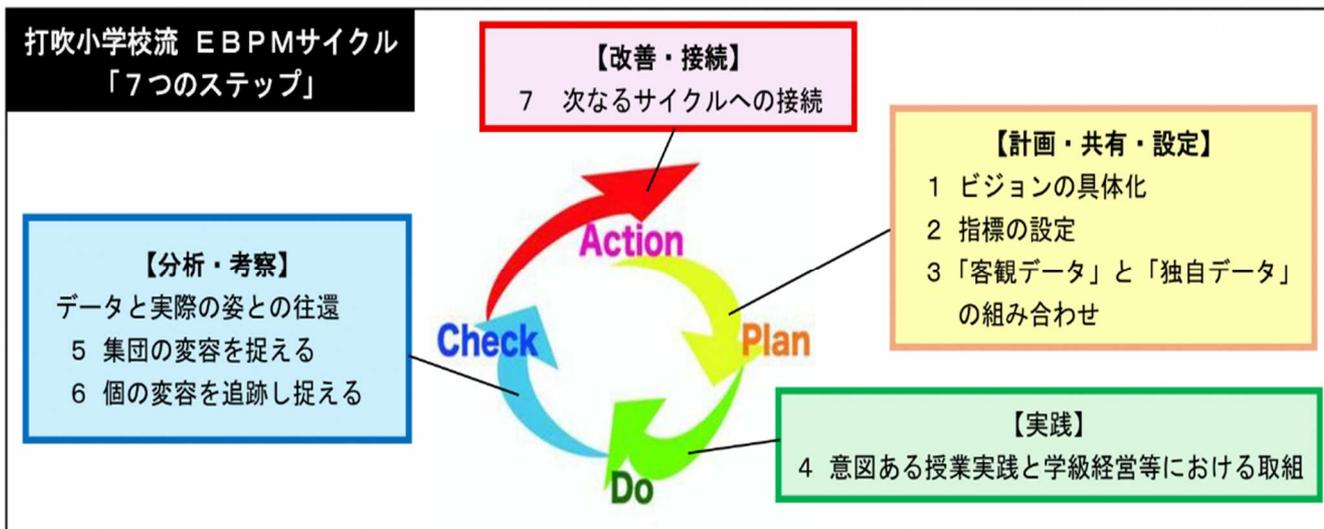


「非認知能力の向上に向けた打吹小学校の歩みと足跡
—学校におけるEBPMの実際と可能性—」（P64～71）

非認知能力の向上に向けた打吹小学校の歩みと足跡【続編】 —打吹小学校流・EBPMサイクル「7つのステップ」—

1 打吹小学校流・EBPMサイクル「7つのステップ」

打吹小学校はEBPMを基盤として、以下に示すようなPDCAサイクルを構築し実践を重ねた。



上記サイクルの「7つのステップ」についての概要は以下の通りである。なお、研究推進を中心として行われた各取組の詳細や背景にある考え方等については、昨年度の報告書を確認いただきたい。

【Plan】 計画・共有・設定

ステップ1：ビジョンの具体化

「学校としてどんな子どもの姿を目指すのか」。全ての出発点は学校のビジョンであり、全教職員で共有しておく部分である。打吹小学校が目指すのは、『『ひとり立ち』する子ども（知の創造者）の育成』。その姿の具体を、子ども達の「非認知能力」・「学習方略」の視点で明確にして、共有した。

ステップ2：指標の設定

子ども達につけたい力について、「非認知能力」・「学習方略」の視点から、具体的な姿を言語化し、評価指標へと落とし込んだ。指標は、目指す姿やつけたい力を教師と子ども、それぞれに示したメッセージでもある。そのため、各教室に掲示するなどして意識化・共有化を図った。さらに、指標に呼応する形で児童向けアンケート（「学びの達人アンケート」）を開発した。

※開発した児童向けアンケートは年に複数回実施され、目指す姿に向かう上で現在地を適宜把握することのできる強力なアイテムとなった。

ステップ3：「客観データ」と「独自データ」の組み合わせ

学力に加えて非認知能力・学習方略の伸びを経年で捉えることのできる「とっとり学力・学習状況調査」及び「非認知能力等調査アプリ『見え～る』」等に基づいた強力な「客観データ」と、自校の子ども達の姿に合わせて開発した小回りの利く「独自データ」（ステップ2）とを組み合わせ活用する仕組みを整えた。

※質の異なる調査を組み合わせ活用することで、それぞれの調査の長所を生かし、年間を通して子ども達の実態を多面的に捉える仕組みが整えられた。

【D o】 実践

ステップ4：意図ある授業実践と学級経営等における取組

学習指導案の中に評価指標を明記し、授業における「しかけ」や「発問」が、子ども達のどの能力を刺激するものなのか等、指導の意図を明確にした実践を積み重ねた。また、授業にとどまらず、日々の学級経営をはじめ、学校教育活動全般において子ども達の非認知能力を育てる様々な取組を行った。

【C h e c k】 分析・考察

ステップ5：データと実際の姿との往還 ～集団の変容を捉える～

職員研修等において、調査によって得られたデータ（数値）と子ども達の実際の姿とを照らし合わせ、「なぜこの数値になっているのか」を教職員が対話しながら解釈した。そして、データ（客観）と実態（主観）を往還させ、教職員同士で数値の意味付けを行い、さらに焦点化された問いや方針を生み出した。

ステップ6：データと実際の姿との往還 ～個の変容を追跡し捉える～

学校統合による個への影響を探るため、特定の個にフォーカスしてデータによる追跡を試みた。データと実際の姿とを往還させることで、中・長期的な児童の変容や教師の関わり等を振り返りながら解釈し、その後の方針を立てた。

※ステップ5、ステップ6は、「振り返りを行うことと、次なる指針を手にすることは常にセットである」という考えのもと、教職員による対話を重視して行っている。データと実際の姿とを往還させた分析・考察は、まさに現場の教師にしかできない重要なステップと言える。

【Action】 改善・接続

ステップ7：次なるサイクルへの接続

分析・考察を通して生まれた焦点化された問いや方針に基づき、さらなる指導・支援に向けた仮説を立て、新たなサイクルへとつなげた。

昨年度1年間の取組においても、次なる指針が見出され、今年度の取組につながる新たなサイクルが生まれた。具体的にどのような実践の変化が生まれたのかについては、次項にて紹介する。

2 今年度の取組例 《ステップ4「意図ある授業実践と学級経営等における取組」に関連して》

「学んだ方略（ワザ）を意識し、駆使することのできる子を育てるためには、どのような取組をすればよいのだろうか？」

これは、昨年度校内で行われた分析・考察研修（※上記サイクルではステップ5に該当）を通して、教職員が焦点化させた問いである。そしてこの問いの解決のために、以下のような方向性を導き出した。

「既得の方略（ワザ）を使わなければ解決できない学習問題や学習場面をいかにしかけていか」
「子ども達が方略（ワザ）を考えるための掲示やノート等が、子ども達の環境として整っているか」

以上のように、教職員は分析・考察を通して子ども達の現状に対する問いを洗練させ、今後の授業改善の明確な方向性を導き出した。今年度は、その方向性に基づき、さらなる授業改善が行われることになった。以下は、今年度の授業実践の一例である。

第3学年 算数科「表とグラフ」（令和7年度実施）学習指導案と単元計画表

| | 研究の評価指標 | 児童の動き |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | 学習活動・児童の反応・手立て等 | |
| 13:40 | <p>1 本時の学習問題を設定する。 「3年生のグラフを見て、気づいたことを言いましょう。」 ・校庭でのけがが「一番多い」 ・ろう下でのけがが「一番少ない」。</p> <p>しかけ 一見よく似ているが、よく見ると目盛りの大きさが違う2つの棒グラフを提示する。 「山本先生が、3年生と6年生のけがの数を比べるために、6年生のグラフを作ってくれました。2つの棒グラフを見て、気づいたことを言いましょう。」 自己効力感① 方略①</p> <p>・6年生も校庭でのけがが「一番多い」。 ・どちらの学年も、校庭でけがをした人の数は同じ。わけは、棒の長さが同じだから。 ・あれ？よく見ると目盛りの大きさが違うよ。3年生の方が多いんじゃないかな？ ・目盛りの大きさが違うと比べにくいな。</p> <p>問 2つの棒グラフをくらべるわざ</p> | <p>学校独自の評価指標の項目を明示 (学習指導案中のどこに設定しても可)</p> <p>・打吹小学校のけがの数について、学年で比較するという目的をおさえる。(T1) ・6年生のグラフは、前時のまともを意識して作成した棒グラフであるが、3年生の棒グラフと比較するという目的にあった棒グラフになっていないことをおさえる。(T1)</p> |
| 13:47 | <p>2 みんなで話し合う。</p> <p>3 3年生と6年生のグラフを比べてどうですか。気づいたことを言いましょう。 ・どのけがも、3年生の方が多い。 ・6年生はけがが少ないから、さまりをよく守っているんじゃないかと思う。 ・目盛りの大きさをそろえると、パッとみてすぐに比べることができる。 4 発見したワザ（作戦）をまとめる</p> <p>手立て② 自己効力感④ 「2つのグラフをくらべる時は～」という言葉を使い、子どもたちの言葉でワザをまとめる</p> | <p>・作り直す前と作り直した後の2つの棒グラフを提示し、目盛りの大きさをそろえることの意味を理解させやすくする。</p> <p>◎ 2つの棒グラフの目盛りの大きさの違いに気づき、事柄の特徴を考えた説明したりしている。【思・判・表】(C)の児童への支援 ・考える際の手助けとして、棒グラフの目盛りに印をつけたり、数値を記入したりして、視覚的に大きさをとらえやすくする。(T1、T2) ・目的にあった棒グラフを作成する。</p> |
| 13:57 | | <p>★本時に獲得した方略（ワザ）の具体を、児童それぞれが自分でまとめる場面の設定。方略を意識し使うことを意図して設定した。</p> |

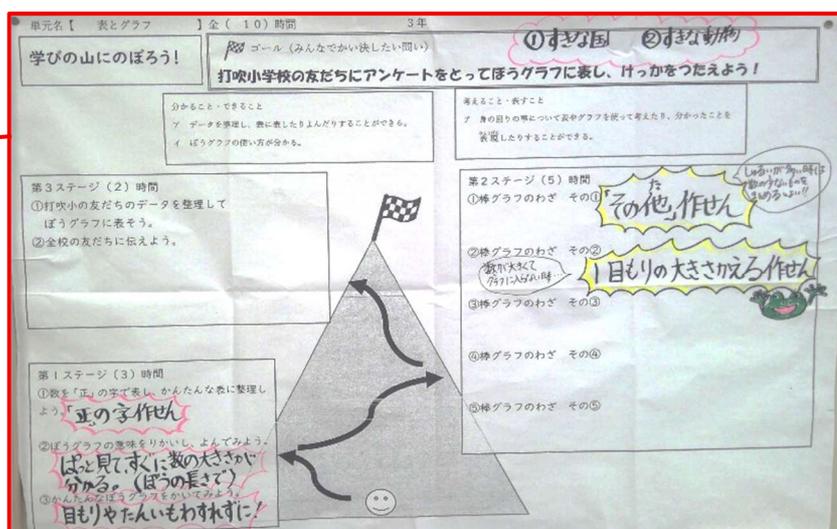
学習問題を子どもたちのものとするための**しかけ**

全学年共通で、この時間に身に付ける**方略**を「ワザ」として共有

「考えなくなる」「話さなくなる」**発問**を精選した言葉で設定

※赤枠及び青色付箋部分は、特に今年度大事にした部分である。

★単元計画表：単元の魅力的なゴールとプロセスを明確にすることで、子ども達の学びの目的意識や主体性を引き出そうとした。同時に、子ども達が各時間に獲得した方略を可視化することで、方略を使いながら課題解決していくための環境を生み出した。



※この授業の様子は、打吹小学校ホームページ「校長ブログ」(令和7年6月26日号)でも詳しく紹介されている。

データ活用の目的は、実態や成果の把握にとどまるものではない。データと実際の子どもの姿を往還させることによって得られる情報を基にして、教師の授業改善にまで確実につなげることが重要である。この営みが、教師や子ども達の成長を促していくと考える。

3 今年度の取組例

《ステップ6「データと実際の姿との往還 ～個の変容を追跡し捉える～」に関連して》

※本内容について Web 版では割愛します。

4 学校におけるEBPMを推進する上での重要な視点 ～学校長の言葉をもとに～

打吹小学校が挑戦し取り組み続けてきたことは、まさに「現場の教職員にしかできないEBPM」の一つのモデルと言える。

最後にまとめとして、学校におけるEBPMを推進していく上での重要な視点についていくつか示す。以下に示す内容はいずれも、本プロジェクトを進めていく過程において、山名 毅 校長が繰り返しメッセージとして発していたことを基にまとめたものである。

□「数字(客観)」は有能だが全てを語ることはできない。教師の「感触(主観)」もまた、すべてを語れるわけではない。

→この両者を常に対話させ、解釈し、子どもに応じた支援を創出できるのは、やはり日々子どもと向き合う現場の教職員だけである。ここが、学校におけるEBPMの最も肝の部分だと言える。

□データは重要なきっかけを示してくれるが、答えを示してくれるものではない。

→だからこそ、データの背景にある子どもや教師の営みを振り返り、データと実際の姿とを往還・照合

させながら、今後に向けて何らかの仮説を立てて取り組んでいくことが必要である。その際、データを単なる数字としてではなく、数字の向こうにいる生身の「子ども」を絶えず見ながら検証し、改善を図っていくスタンスが重要である。

□教職員の中から課題解決に向かう動きや機運が生まれてくるプロセスにこそ大きな価値がある。

→ある程度の時間と労力は要するが、教職員一丸となつてこうしたプロセスを積み重ねることが、学校組織及び教職員一人一人の力量を上げることにつながる。子ども達に求められる学びのプロセスと教職員のそれとは、やはり相似形と言える。こうしたプロセスに価値を置くことが、教職員が主体的にEBPMサイクルを回していくことにつながる。なお、詳細は記していないが、こうしたプロセスを教職員が主体となつてつくっていくために、学校長とキーパーソンとの間で高いレベルでのイメージの共有・認識の擦り合わせがじっくりと行われていたことを付け加えておく。

□しかけが生み出したシーンにこそ教育活動の価値はある。

→子ども達は日々素敵な姿を見せてくれるが、たまたま出会ったシーンには、実はそれほどの価値はなく、それは子どもが元々備えていた成長力によるおかげだと思った方がよい。学校教育においては、「教師がねらいを定めてしかけたこと」について見取り、検証し、それを踏まえて絶えず改善を図っていくことが重要である。そのためにも、常に目指す姿とそれを検証するためのエビデンスを学校が携えていることが必要不可欠である。学校にとって最も重要なことは、しかけたことが子ども達の変容や成長につながったのかどうかを見取り検証するための「ぶれない軸」をもち、目指す子どもの姿に向けて「しかけ続けること」である。

以上、打吹小学校が挑戦し、つくりあげた数々の取組は、データの力と人間の力とを融合させ、組織的な教育力の強化に取り組んだ先進的な事例の一つと言える。

なお、昨年度及び今年度の報告においては、研究推進や学級経営の側面を中心に紹介してきたが、打吹小学校ではこの他にも、学校教育全体を通して子ども達の非認知能力を育てるための実に様々な取組を行っている。これについては、打吹小学校ホームページ「校長ブログ」にて随時豊富な取組の数々が紹介されているので、具体の様子等を知りたい場合は閲覧をおすすめする。

~ MEMO ~

客観的な根拠を重視した教育政策（EBPM）の推進 【「とっとり学力・学習状況調査倉吉市プロジェクト」—倉吉市立西中学校の事例】

1 はじめに

本プロジェクトでは、とっとり学力・学習状況調査（以下、とっとり学調）データの学校経営への活用について、学校、倉吉市教育委員会、県教育委員会が一体となって共同研究を進めている。倉吉市立西中学校の取組の概要を報告する。

2 これまでの取組

西中学校では、「非認知能力（人間力）を育てることが学力向上につながる」という仮説をもとにした学校経営が行われており、その検証にとっとり学調のデータを活用してきた。データから生徒の伸びの状況や特徴的な傾向を把握し、伸びの要因等について分析・考察を行い、その後の方向性や具体的な施策につなげていこうと取り組んできた。「強みを生かして学校経営や学級経営を行うこと」や「一人一人をしっかりと見取り適切に支援すること」が学力向上や不登校の未然防止につながると考え、成果につながったと見込まれる具体的な取組を昨年度の報告書で紹介している。

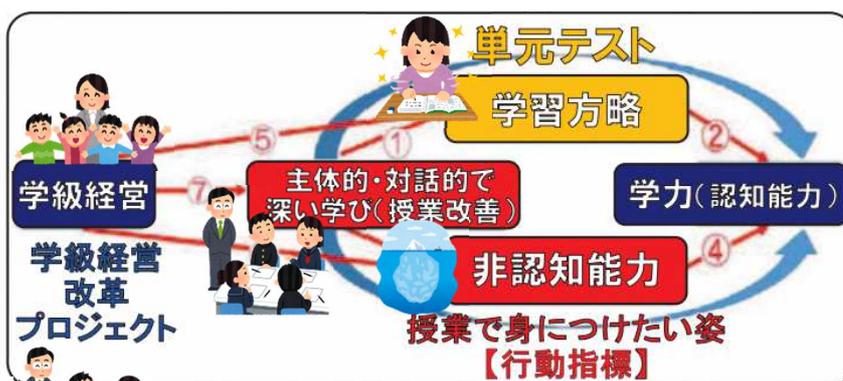


令和6年度の
報告書はこちら

3 令和7年度の取組

西中学校が推進する学力向上に向けた研究の全体像は、右図【1】に集約されている。この図をもとに令和7年度西中学校が行ってきた、データを効果的に関連付けた具体的な取組について、非認知能力と授業改善、学習方略、学級経営の3つの視点から詳述する。

【1】学力向上に向けた構想図



（1）非認知能力と授業改善

4月、7月、12月にそれぞれ非認知能力等調査アプリ「見え～る」（以下、「見え～る」）を活用して、非認知能力及び学習方略に関する全項目のアンケート調査を全学年で実施している。2、3年生は令和6年度のとっとり学調の数値、1年生は4月の数値を基準として、そこからの変化を分析及び活用している。

①各教員による具体的な方策の設定

年度当初、授業で重視する非認知能力の項目について各教員が各自で決定し、その項目を伸ばすための具体的な方策【2】を定め、授業実践を行っている。

【2】各教員が定めた重視する非認知能力と具体的な方策（一例）

| 非認知能力 | 具体的な方策 |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 自己効力感 | ・努力を認める声かけを行う・見通しをもたせる・学ぶ手段を選択させる・学習方法の振り返りを書かせる・質の高い振り返りに印をつける |
| やり抜く力 | ・本時のゴール（何ができるようになればいいのか）を伝える・十分な活動時間を設ける ・上手いかないことがあっても、生徒が課題とを感じるまで見守る・毎時間達成度を測る 確認問題を実施する |
| 向社会性 | ・グループをランダムで決める・誰とでも関わることの大切さを伝える |

各教員が教科の特性に応じた非認知能力の育成を明確に意識することで、学校全体の研究方針が形骸化することなく、日々の授業において具体的に反映されていた。各教員の専門的なアプローチが多角的に組み合わせることで、生徒はあらゆる教科の学びを通じて、自己調整力や他者への共感といった多様な資質・能力を、一貫して育むことが可能となった。

②非認知能力の結果を踏まえた授業研究会

1 1月の授業研究会では、先述の「見え～る」を活用したアンケートにおいて、学習方略と非認知能力の数値に顕著な伸びが見られた第3

【3】3年生の学習方略と非認知能力の変化の推移

| | 学習方略 | | | | | 非認知能力 | | | | |
|---------|------|-----|-----|------|--------|-------|-----|----------------|------|-------|
| | 作業 | 柔軟 | 認知的 | 努力調整 | プランニング | 自己効力感 | 勤勉性 | 自制心 | 向社会性 | やり抜く力 |
| R6_4月学年 | 3.3 | 3.3 | 3.6 | 3.6 | 3.3 | 3.1 | 3.4 | R6_4月はとっとり学園より | | |
| 4月学級 | 3.8 | 3.8 | 4 | 3.5 | 3.8 | 3.4 | 3.7 | 3.9 | 4.1 | 3 |
| 7月学級 | 3.9 | 3.8 | 4 | 3.6 | 3.7 | 3.5 | 3.7 | 3.9 | 3.9 | 3 |

学年に着目した。「なぜ3年生は伸びたのか」という問いを核心に据え、数値の背景にある具体的実践を全教員で共有・検証することを目的として、3年生全クラスの授業公開を実施した。

授業参観においては、理科と数学の授業では、生徒同士が模型の活用や図解、動画の参照といった「学び方の工夫」を互いに補完し合いながら、最適解を導き出す姿が見られた。また、社会科の授業では、単なる感想の交流を超え、根拠に基づいた批判的吟味を行うなど、「向社会性」や「やり抜く力」を発揮しながら思考を深化させるプロセスが日常化していた。このように、いずれの学級でも「主体的・対話的で深い学び」が極めて高い水準で実践されていることが下図研究協議【4】で確認された。授業研究会を通して、これらの成果は、各教員が個々で設定した「重視する非認知能力と具体方策」が授業に浸透していること、そして学級経営の充実による「安心感のある学びの場」が構築されていることに起因すると分析された。この結果、【5】にみられるように、生徒は表面的な知識の習得に留まらず、事象を構造的に捉える「概念的理解の深化」へと到達していることが確認された。この授業研究会では、生徒の姿からその背景にある要因を掘り下げることで、全教員が自身の授業改善や生徒への関わり方を具体的に模索する貴重な機会となった。

研究協議【4】なぜ3年生は伸びたのかを 全教員で共有



【5】生徒の姿を根拠にした、3年生が伸びた要因

- ①あきらめずにかかわり続けた
- ②粘り強い指導
- ③指導の軸・方向性がぶれない
- ④生徒と教員の信頼関係の構築
- ⑤学級を自分たちでつくる力を育てる
 - ・自己決定させる→生徒にゆだねる
 - ・大人がいなくても動ける集団に育てる
= 自立した人になっていく
- ⑥「できた」をつなげていく

日々の生活
の中での工夫

日々の授業
の中での工夫

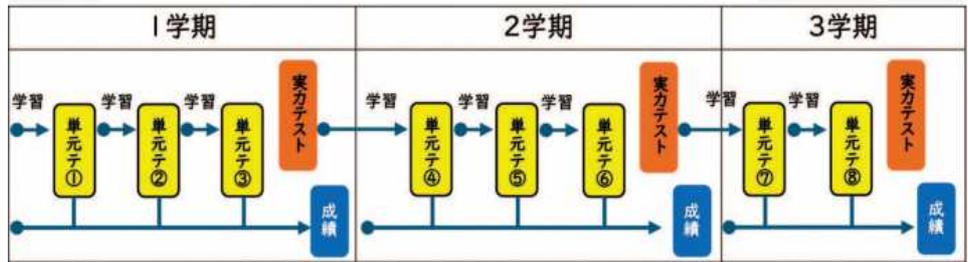


(2) 学習方略

【6】 単元テスト導入後の1年間の流れ

① 単元テストの導入

生徒の学習方略の育成と教師の授業改善を目的として、これまで実施していた定期テストを廃止し、右図【6】



の流れで、各教科で単元テスト及び振り返りを実施している。4月に各学年・各教科で下図【7】を作成し、これに基づいて単元での授業づくりを進めた。生徒は「授業→テスト→振り返り→学習方略の改善」を単元ごとという以前よりも短いサイクルで行えるため、テスト対策や学習方略の改善が行いやすくなっている。また、教員も生徒一人一人の変化をより丁寧に見取ることができ、自身の授業改善に繋げている。「今回の取り組み方を振り返ることで次回のテストに向けた見通しがもてる」という生徒からの声もあり、単元テスト後のリフレクション活動が定着している。テスト結果を一過性のものとせず、次なる学びへと繋げるメタ認知の習慣が着実に醸成されている。

【7】 学習内容とテスト計画一覧表 (第1学年)

| | 1 学期 | | | | 2 学期 | | | | 3 学期 | | | |
|----|------------------------|----------------------|----------------------|-------------------------|----------------------|------------------------|----------------------|----------------------|--------------------------|-------------------------|----------------------|--------------------------|
| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 | |
| 国語 | 『言葉の美しさ』 単元テスト | 『現代を捉える』 単元テスト | 『伝える』 単元テスト | 『わかりやすく伝える』 単元テスト | 『展開を捉える』 単元テスト | 『表現を評価する』 単元テスト | 『考えをまとめる』 単元テスト | 『多面的に検討する』 単元テスト | 『伝統文化に親しむ』 単元テスト | 『読みやすく書くための指導』 単元テスト | 『詩を読む』 単元テスト | 『詩を詠む』 単元テスト |
| 社会 | 『世界の姿』 単元テスト | 『日本の姿』 単元テスト | 『人々の生活と環境』 単元テスト | 『人々の歴史と時代区分』 単元テスト | 『東アジアの中の僕』 単元テスト | 『中国にわたった国づくり』 単元テスト | 『アジア州』 単元テスト | 『展開する天皇』 単元テスト | 『貴族の政治』 単元テスト | 『北アメリカ州』 単元テスト | 『南アメリカ州』 単元テスト | 『アメリカ州』 単元テスト |
| 数学 | 『正の数負の数』 単元テスト | 『正の数負の数』 単元テスト | 『正の数負の数』 単元テスト | 『正の数負の数』 単元テスト | 『方程式』 単元テスト | 『変化の対応』 単元テスト | 『変化の対応』 単元テスト | 『平面図形』 単元テスト | 『平面図形』 単元テスト | 『空間図形』 単元テスト | 『空間図形』 単元テスト | 『データの活用』 単元テスト |
| 理科 | 『自然の中にあふれる生命』 単元テスト | 『植物の特徴と分類』 単元テスト | 『動物の特徴と分類』 単元テスト | 『いろいろな気体とその性質』 単元テスト | 『水溶液の性質』 単元テスト | 『物質の姿と変化』 単元テスト | 『物質の姿と変化』 単元テスト | 『光による現象』 単元テスト | 『音による現象』 単元テスト | 『光による現象』 単元テスト | 『火をいく大地』 単元テスト | 『身近な大地』 単元テスト |
| 英語 | 『Program 1』 単元テスト | 『Program 2』 単元テスト | 『Program 3』 単元テスト | 『Project 1』 単元テスト | 『Program 4』 単元テスト | 『Program 1』 単元テスト | 『Program 2』 単元テスト | 『Program 3』 単元テスト | 『Our Project 1』 単元テスト | 『Program 4』 単元テスト | 『Project 2』 単元テスト | 『Our Project 2』 単元テスト |

② 学習相談での非認知能力等調査アプリ「見え～る」の活用

生徒一人一人から学習の様子や困り事を聞き、学習方略の個別支援を行うために「学習相談」を実施している。学習相談では、教師は学習習慣に関するアンケートと「見え～る」の個人結果をもとに、生徒一人一人に学習のアドバイスを行っている。生徒は各自で学習時間や習慣、学習方法に関する目標を1つ決定し、保護者と共有している。このように、客観的なデータに基づき自身の学習状況をメタ認知させるプロセスは、生徒が自分に合った学習方略を自律的に選択・修正していく力を養う機会となっている。

(3) 学級経営の充実



①チーム担任制の導入

特定の担任だけでなく、学年団の全教員がローテーションで各クラスを回り、チームとなって生徒一人一人の状況を共有し、多角的な視点で見守り、支援する体制を敷いている。これにより、一人の生徒に対してより手厚く、一貫した関わりが可能になっている。また、チーム担任制の実施は、生徒自身にも「自分たちでクラスを運営していく」という意識を芽生えさせるための取組にもなっている。教員の見守りの目が多層化されたことで、生徒はより挑戦することを恐れなくなり、一人一人が自立した学習者として成長を遂げるための理想的な教育環境が整いつつある。

②ステキな行動チャート（行動指標）の作成

下図【8】は各クラスで年度当初に作成している「ステキな行動チャート（行動指標）」（以下、行動チャート）である。これは、①登校～朝の会、②授業前（休憩）、③授業中、④給食、⑤掃除、⑥終学活～放課後の6つの場面で「思いやり」「責任」「挑戦」の3つのカテゴリーごとに目指すべきクラスの具体的な姿を想起し、まとめたものである。学級委員を中心に、各クラスで今週の重点目標を決定し、日々目標の確認と振り返りを行っている。この取組の継続により、生徒の意識は『言われたことをやる』受動的な姿勢から、『自らクラスの課題を見出し解決しようとする』主体的な姿勢へと変容を遂げている。行動チャートで定義された具体的な行動が、日常のあらゆる場面で目に見える形となって現れることで、非認知能力の向上が単なるスローガンに留まらず、生徒一人一人の確かな成長として結実している。

【8】ステキな行動チャート(行動指標)

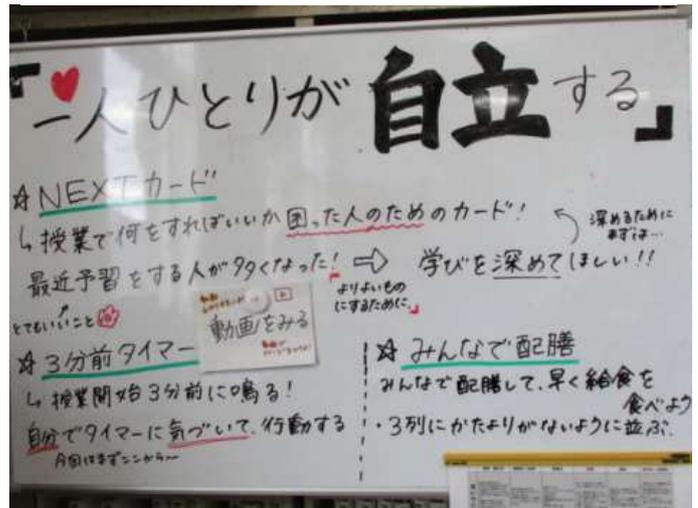
| ステキな行動チャートと学級目標 | | 行動チャート | | | | |
|-----------------|------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | 登校～朝の会 | 授業前（休憩） | 授業中 | 給食 | 掃除 | 終学活～放課後 |
| 思いやり | ①相手に挨拶 ②挨拶を返す ③班の人の名札をくばる ④席に早く着く ⇒8時1分 | ⑪次の準備をしておく ⑫授業が始まるよと声をかける ⑬移動を静かにする ⑭班で声掛けをする ⑮準備に手間取っている人の手伝いをする | ⑯こまっているひとがいたら教えてあげる ⑰友達の鉛筆などが落ちたら拾ってあげる ⑱目を見て聞く ⑲わからないところがあったら教え合う ⑳静かにする | ㉔給食当番の仕事にはやく取り掛かる ㉕準備を早くする ⇒食べる時間の確保 ㉖食後に机を運んであげる ㉗みんなのぶんを配膳する ㉘黙食をする | ㉙友達と協力する ㉚早くバケツを準備する ㉛友達のことを考えながら掃除する ㉜机運びを手伝う ㉝1さっと終わることが出来る ㉞静かに掃除する | 64早めに準備する 65あいさつを大きな声でする 66譲り合う 67周りのことを考える 68部活に真剣に取り組んでいる 69名札の回収を忘れずにする 70ほくほくタイムで優しい言葉をたくさん言う |
| 責任 | ⑤時間に間に合うように... ⇒家を早く出る ⑥提出物をちゃんと出す ⑦相手に聞こえる声で挨拶 ⑧時計を見て行動する ⑨困っている人がいたら助ける | ⑭みんなに声をかける ⑮2分前には席につく ⇒時計を見て行動する ⑯班の仕事をする ⑰教科書など道具を出しておく | ⑱騒がず、ちゃんと授業を受ける。 ⇒授業に集中する ⇒授業に参加する ⑲準備物を用意する ⑳班の係をちゃんとする ㉑相手の話をしっかりと聞く ㉒分離礼をする | ㉔食器が割れないように... ⇒準備を早くする。 ⇒当番の仕事をふざげず静かにする ⇒丁寧に食器を返却する ㉕みんなに配る量と同じにする ㉖給食当番を真面目にやる | 53隅々まできれいに 54集中して掃除する 55取り掛かりが早くする 56時間内に掃除を終わらせる 57最後までやる 58バケツを用意する 59ゴミがあれば拾う 60自分が決められた場所を掃除する | 71事故をおこさないように努力する 72交通ルール・マナーを守る 73最終下校を守る |
| 挑戦 | ⑩みんなにあいさつしよう ⇒進んで挨拶 ⇒自分から挨拶 | ⑱始まる前に準備をする ⑲3分前行動をする ⑲周りを見て行動する | ⑳自信を持ってできるところまで説明する ㉑わからないことを自分から友達に聞く ㉒発表するように努力する | ㉔騒いでいたら思い切っ て注意する ㉕できるだけ給食を早く食べる ㉖できるだけ給食を残さず食べる | 61苦手な掃除でも頑張っ てやる 62こぼれた水を拭く 63早く掃除を始める | 74さようならのあいさつ をするように心がける 75怪我をしないように周り を見る 76みんなにお便りを配る |

主体性をもった行動を増やす部分で「挑戦」とする

③班長会の開催

行動チャートの振り返りを踏まえて、クラスごとに班長会を実施している。クラスの課題を自分たちで解決するためにどのような取組をしていくべきなのかを自分たちで協議している。右図【9】は「一人ひとりが自立する」ためにはどうすればよいのかを生徒が協議し、具体的な取組をまとめたものである。この協議内容は、単なる目標設定で終わらせるのではなく、次回の振り返りにおいて、その達成度を検証する材料として活用されている。このように、行動指標の確認から課題の抽出、そして解決に向けた合意形成という一連のサイクルを生徒の力で回し続けることにより、学校生活全般における心理的安全性が確保され、それが日々の「主体的・対話的で深い学び」を支える強固な原動力となっている。

【9】 班長会での協議内容



④学年団の取組

学期ごとに各学年団で学年やクラス及び生徒一人一人の非認知能力が前回のアンケートからどのように変化しているのかの分析を行っている。変化の要因を分析し、次の学期に学年として重視すべき非認知能力の項目と伸ばすための具体的な方策を協議している。この協議の場は、教員同士が互いの実践知を交流させ、新たな指導のアイデアを創出する共創の場として機能している。変化の要因を多角的に分析し、次なる具体策を、納得感をもって共有することで、組織としての機動力が高まっている。右図【10】は1学期末に3年団が作成した、2学期の学級経営での取組についてまとめたものである。これは学力向上の土台作りとして非認知能力を育成していくために、具体的にどのような取組を行っていくのか、それらの取組がどのように関連しているのかを意識して作成されている。

【10】 2学期の学級経営での取組計画



(4) 終わりに

西中学校が積み重ねてきた取組は、これまでの経験や感覚で行ってきた教育的指導からの脱却を図り、データに基づく、生徒一人一人に寄り添った指導への転換に繋がっている。ベテランから若手まで、全教員が共通のデータや生徒の姿を根拠に議論することで、主観に頼らず多角的な視点で、生徒一人一人の可能性をより確実に捉えられるようになってきている。また、「数値として表れにくい」とされてきた非認知能力を、学力向上を支える基盤として構造的に捉えたことは、EBPMの先駆的な事例として大きな価値がある。

データは単なる数字ではなく、生徒一人一人が発しているメッセージである。ここに向き合うことは「誰一人取り残さない学び」の保障に繋がっている。今後もこれまでに蓄積された分析結果やデータを活用していくことで、プランニング方略や取組内容の深化が期待できる。西中学校が示した「データに基づく組織的な対話」と「生徒の自治を基盤とした授業改善」の取組こそが、これからの時代に必要とされる力を育むために極めて意味深いものとなるを考える。

客観的な根拠を重視した教育政策（EBPM）の推進
【岩美町教育委員会等の取組】

1 令和7年度の戦略会議で挙げた研究テーマ

- ・15才の春、10才の春を意識した小中連携 ※小中学校のデータを基にした学校間連携
- ・「伸び続ける児童生徒の育成」するために ※高校でも伸び続ける子ども
⇒このような視点をもって、推進チーム会議で協議し、学校訪問等を行った。

2 具体的取組の記録

(1) スケジュール

| 日にち | 内容 | 参加者 |
|-----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------|
| 4月15日（火） | 第1回戦略会議 ・現状についての情報共有 ・研究についての協議 | ・町教委 ・県教委 |
| 7月28日（月） | 岩美町立小学校訪問 ・岩美南小学校訪問 現状についての情報共有、取組についての協議 | ・町教委 ・県教委 ・学校 |
| 11月18日（火） | 第2回戦略会議 ・令和7年度調査結果をもとにした協議及び取組について | ・町教委 ・県教委 |
| 11月26日（水） | 第3回戦略会議兼地方教育アドバイザーによる町教委及び学校訪問 ・岩美町教委員会訪問 現状についての情報共有、取組についての協議 ・岩美南小学校訪問 校長面談、授業参観等 | ・町教委 ・県教委 ・学校 ・地方教育アドバイザー |
| 12月9日（火） | 岩美町立中学校訪問 ・岩美中学校訪問 授業参観 令和7年度調査結果をもとにした協議 | ・町教委 ・県教委 ・学校 |
| 12月23日（火） | 岩美町立小学校訪問 ・岩美西小学校、岩美南小学校訪問 令和7年度調査結果をもとにした協議 | ・町教委 ・県教委 ・学校 |
| 3月2日（月） | 兵庫教育大学との共同研究分析報告会 | ・町教委 ・県教委 ・学校 |

(2) 岩美町戦略会議の取組

①とっとり学力・学習状況調査の分析

令和7年度の調査結果をもとに、各学校の結果の伸長につながったと考えられる取組や、今後の取組の方向性について意見交換を行い、各学校で取り組むことについて協議した。

②とっとり学力・学習状況調査結果活用協力校との連携

令和7年度とっとり学力・学習状況調査結果活用協力校の岩美南小学校と、定期的にとっとり学力・学習状況調査の活用や学校の現状について意見交換を行い、今後の取組について協議を行った。

(3) 地方教育アドバイザーによる町教委及び学校訪問

地方教育アドバイザーを招聘し、学校訪問及び岩美町教育委員会訪問を行い、とっとり学力・学習状況調査の意義や教育データの活用についてアドバイスをいただいた。また、今年度の調査結果をもとに今後の取組の方向性について協議を行った。

(地方教育アドバイザー)

- ・文部科学省初等中等教育局教育職員政策課 教員免許・研修企画室長
岩美町地方教育アドバイザー 大根田 頼尚 氏
- ・文部科学省研究開発局宇宙開発利用課 国際係長
岩美町地方教育アドバイザー 大井 康平 氏

(4) 岩美町立小中学校訪問

岩美町教育委員会と県教育委員会が岩美町内の全学校の結果を把握し、各学校におけるとっとり学力・学習状況調査の結果の活用状況や学校経営にどう生かしていくか、調査結果をもとにどのような取組に力を入れていくか等について各学校管理職及び担当者、岩美町教育委員会、県教育委員会で協議した。

○協議例：(分析シートと実際の見取りによる分析から)

- ・どの層も伸びているのは、それぞれに合った手立てができてきている証拠である。感覚やイメージを焦点化して、生活とつなげることも子どもたちの学力の伸びと関連してくると推察される。
- ・3学期は、キーワードとして「解きなおす、ほめる、C→Bに引き上げる、問いかけ」を意識して指導の充実を図る。

(5) 兵庫教育大学との共同研究

令和7年度は、令和6年度兵庫教育大学との共同研究結果を踏まえ、各学校において学習方略や非認知能力に着目し、それらを指標として設定した校内研究を進めるとともに学習方略や非認知能力に関連する要因について調査研究を実施した。

また、県教育委員会が開発した、各学校でいつでも何度でも非認知能力等について調査し、児童生徒の変化を見取ることができる非認知能力等測定アプリ「見え〜」を活用して測定した学習方略、非認知能力と、兵庫教育大学が作成した質問調査のデータを活用した調査研究を進め、令和8年3月に分析報告会を行った。

3 成果と課題

(1) 成果

- 岩美町教育委員会と県教育委員会がチームとなり、調査結果の分析をすることで、課題を共有し、その対策について協議することができた。
- とっとり学力・学習状況調査分析方法説明会等で小学校と中学校がそれぞれ持っているデータを共有し分析することで、中学校区内の小中連携を充実させることができた。
- とっとり学力・学習状況調査結果をもとに学校の実態について協議することで、教育データを客観的に把握して分析し、取組の成果を検証したり、改善の方向を検討したりすることができた。

(2) 課題

- とっとり学力・学習状況調査を各学校で効果的に活用するには、学校担当者や教科担当者のみではなく、学校全体で結果を分析し、効果的な取組やそのやり方を継続する方法等について、取組の方向性を共有して取り組んでいくことが重要であり、引き続き活用方法について周知を図る必要がある。

客観的な根拠を重視した教育政策（EBPM）の推進 【「とっとり学力・学習状況調査結果活用協力校」－岩美南小学校の事例】

1 はじめに

とっとり学力・学習状況調査（以下、とっとり学調）結果活用協力校では、とっとり学調のデータをどのように学校経営へ活用していくかについて、その方向性や取組について研究している。具体的な取組や検証について、岩美町立岩美南小学校の取組の概要を紹介する。岩美南小学校では、とっとり学調のデータから児童の伸びの状況や特徴的な傾向を把握し、伸びの要因等について分析・考察を行っている。そして、校内研究の際に分析したデータ結果を活用し、今後の方向性や具体的な施策につなげていこうと取り組んでいる。

2 「当たり前のこと」の徹底と「データ」の活用で、学びを自分事に

～非認知能力と学力を伸ばすハイブリッド実践～

基礎的・基本的な内容の指導の徹底と、「データ」を活用した客観的な分析（EBPM）による「個別最適な学習の提供」のハイブリッドな取組を行っている。また、校内研究に「授業で身につけさせたい子どもの姿」を位置付けることで、若手からベテランまで一丸となり組織で取り組む仕組みが、教師の教育力向上につながっている。以下にその実践について紹介する。

①「書く」ことの習慣化と児童による自己選択（国語）

令和5年度当初、「学習に向かえない」児童が多いという課題に対し、まず、評価の転換を行った。初発の感想等において、書いた「量」を教師が徹底的に褒めることで、書くことへの心理的障壁を除去した。次に、書く際の型（柱）の提示を行った。「誰が書いたか」「心に残った点」など思考の柱を児童に提示し、書く内容の条件整理をしたことで、書くことの「質」を向上させた。学校全体でも、書く活動に取り組む際には、「3Z（条件、字数、時間）」を意識し、指導実践した。学びの跡となる板書の構造化を意識し、ノートに書きながら思考する時間を十分確保したことで、自信をもってアウトプット（表現する）できるようになった。



②「自律学習スタイル」の確立（算数）

問題解決の場面では、自己決定を尊重し、「自分で学ぶ」か、「先生と一緒に学ぶ」か等、どの方法で学ぶかを選ばせることで、主体性と責任感を高めた。授業の導入部分では、既習事項とつなげて気づきを共有し、解決の見通しをもたせて取り組むようにした。また、学習を最後までやり切らせるため、教師が一方向的に指示をせず、



算数における「学びの選択」、タブレット端末の活用

児童自身に「目標」や「学び方」を選択させることを重視した。具体物・図解・タブレット端末等、自分に合った解決手段を選択させることで、学習を「自分事」として捉え、責任をもって取り組む姿勢を育んだ。適用題の場面では、タブレットを活用した演習問題や、様々な難易度の問題を用意し児

童が自ら選択して解き進める「自律学習スタイル」を確立した。教師が、中学校での学びを見据え、4・5年時での児童のつまずき（小数、割合、面積等）を的確に捉え、丁寧な個別指導や手立て、授業における反復練習を行うことで、中学校での学びにつなげた。

| | |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p><学び方></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教科書を見る 2. QRコード(教科書) 3. 実さいに動かす 4. 困をかく 5. 友だちに聞く 6. 友だちに聞いてもらう | <p><伝え方></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 式・答え ○ 困 ○ 言葉 |
| <学び方>と<伝え方> | |



適用題の充実

③読解力の向上と読書に親しむ児童の育成

読解力低下という課題に対し、週1回、物語文や説明文の読解問題を家庭学習課題として定期的に提示し、文章を読むコツを丁寧に指導することで、基礎・基本の定着を図ることができた。また、学校経営の柱として「読書で心を耕す」を定め、司書教諭を中心に読書活動の推進を図っている。これらの取組により、読むことへの「自信」が芽生え、児童が自ら進んで読書に親しむようになり、主体的な読書習慣の確立にもつながった。

④「当たり前なこと」の徹底と心を耕す教育活動

「向社会性」の伸びは、単なる道徳的指導の結果ではなく、「教室内の心理的安全性の確保」と「ルーティーンの定着」が土台となっている。まず、時間を守る、自分の考えをもつといった「当たり前のこと」を徹底する指導により、生活基盤が安定し児童の生活に余裕が生まれた。自分自身のことで精一杯だった児童が、周囲や他者に目を向ける余力が生まれた。また、ダンスやボッチャなどのスポーツを通じた様々な方との交流や、地域の方々や文化的な「本物」に触れる機会を意識的に創出するなど、心を耕す教育活動が、他者理解や共感性の向上に寄与し、「向社会性」の伸びにつながったと考えられる。



地域の方との交流（ボッチャ）



チェリストによる本物体験で心を耕す

⑤指導法の共有と組織的実践、非認知能力等調査アプリ「見え～る」の活用

「とっとり学力・学習状況調査」の結果を分析した令和5年度以降、本校の強みと弱みを把握し、「主体的・対話的で深い学びの実施」「自己効力感」「努力調整方略」を伸ばしていく校内研究に取り組んでいる。また、県や町のEBPM研修と連動し、調査データから課題を抽出した。教科目標（国語・算数）を定め、標準学力調査を活用した改善サイクルを組織的に機能させている。

非認知能力等調査アプリ「見え～る」を活用し、数値の絶対値だけでなく、伸びているか（ベクトルの向き）とその要因を分析し、日々の実践を確認している。このことが「主体的・対話的で深い学びの実施」の伸びに寄与していると考えられる。

3 成果と今後の取組

とっとり学力・学習状況調査の児童生徒質問調査において、「主体的・対話的で深い学びの実施」で5年生、6年生ともに大きく数値を伸ばしており、県平均を上回った。さらに5年生は、非認知能力の「向社会性」が県平均を上回った。これは、児童による自己選択、自律学習スタイルの確立、「当たり前のこと」の徹底と心を耕す教育活動等これまで積み上げてきたものが効果的であったと考える。

また、全職員で「授業で身につけさせたい子どもの姿」を明確にしたチェックシート（次頁参照）を作成するとともに、この姿を学習指導案の中にも明記し、授業改善を図った。そして、成果のあった指導法について、全職員で共有することができた。

今後の取組として、非認知能力等調査アプリ「見え～る」を活用し、個別の分析を進め、課題のある児童へのスポット的な支援に繋げていきたいと考えている。

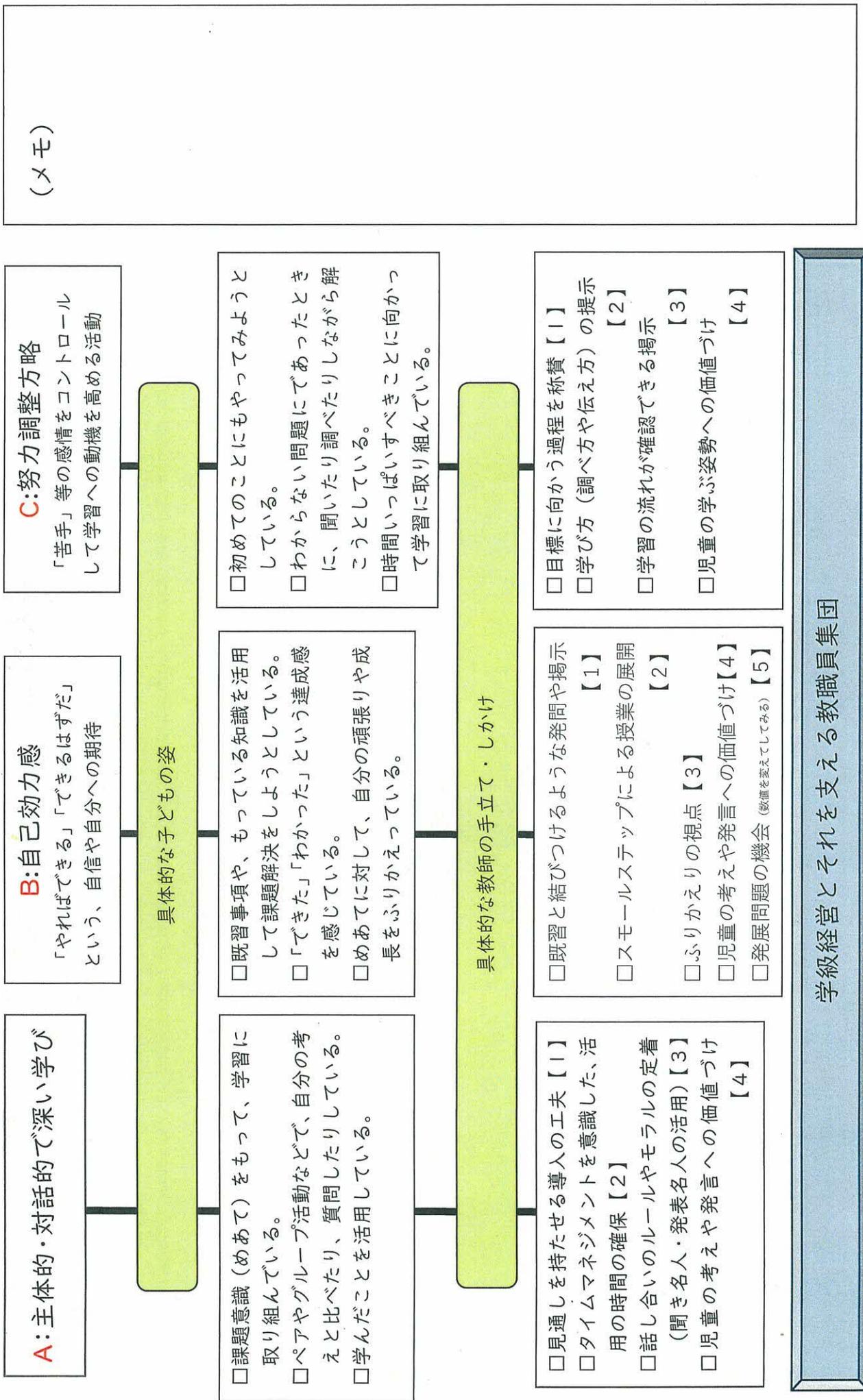



授業で身につけさせたい子どもの姿
（チェックシート） ※掲載資料の実物
データは、上の二次元コードを参照

授業で身につけさせたい子どもの姿（チェックシート）

年（ ） /

岩美南小学校



学級経営とそれを支える教職員集団